

研究課題	習得－活用－探究の3つの学びの場の相互作用を目指したカリキュラムの提案
副題	～学習環境デザインの視点から～
キーワード	習得－活用－探究、相互作用、カリキュラム、学習環境デザイン、5つの学習様式
学校/団体 名	私立 LCA グループ 学校法人 SOLAN 学園 瀬戸 SOLAN 小学校
所在地	〒489-0054 愛知県瀬戸市道泉町 76-1
ホームページ	https://www.seto-solan.ed.jp/

1. 研究の背景

2021 年の文部科学省答申「令和の日本型教育の構築を目指して」では、全ての子どもたちの可能性を引き出す「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に焦点が当てられている。それは、これまでの学校教育において、学習のペースや指導・支援が一人ひとりの学習者のニーズに即して実践されていたとは言い難いということである。また、学習指導要領においては探究的な学びが重視されている。「主体的・対話的で深い学び」の充実のために、「習得－活用－探究」のバランスを工夫し、教科等の「見方・考え方」をこの学びの過程で働かせることを通して資質・能力の育成が期待されている。

本校のカリキュラムは、個別最適な学びのうち、特に学習の個性化を重視し、一人ひとりの興味・関心に応じた探究を行う個人探究を充実させるために何をどのように習得・活用させることが必要かを検討し、学習指導要領の分析をもとに作成した。次期学習指導要領の方向性が見え始め、学習指導要領の分析から、「習得－活用－探究」の3つのレイヤーで構成した本校のカリキュラムを、これから求められる教育のあり方と、具体的な実践の振り返りの両方の視点から捉え直し、構造的に整理し、

その意味・価値について検証する。それによって、教科横断的な学びや個別最適な学び、協働的な学びなどのこれからの学校教育で目指すべき教育の方向性を授業レベルで明確に示すことができると



図1 SOLAN のカリキュラム

考える。以上のことから、本研究では、習得－活用－探究の3つの学びの場の相互作用を目指したカリキュラムの効果を明らかにする。

2. 研究の目的

本研究テーマは、「習得－活用－探究の3つの学びの場の相互作用を目指したカリキュラムの提案～学習環境デザインの視点から～」である。2年間の授業実践を元にカリキュラムの有用性

及び課題を精査し、授業マニュアルを作成する。それを元に授業を実施し、カリキュラムの効果を検証することを目的とする。

3. 研究の経過

(1) 2023 年度 1 年次の研究

①内容と方法

習得、活用、探究の3つの部会に分かれて、5つの授業様式に沿って指導案作成・検討及び模擬授業に取り組み、研究授業を実施した。実施後は、各部会及び全体会で議論し課題を明らかにし、授業マニュアル案にまとめた。また、子どもが3つの学びをどのように認識しているかアンケート調査を実施した。

表1 5つの学習様式

学習様式	学習の対象	学習の主導者	到達目標	資質・能力	期待する児童の姿
⑤ 個人探究	個人の興味・関心	子ども	全員違う	課題解決力/自己調整力/レジリエンス	活動に没頭し、自ら学習を創る
④ 教科横断型プロジェクト	環境・国際などの社会課題	子ども	全員同じ+α	課題解決力、思考力・判断力・表現力等/協働する力	どの教科の知識・技能を活用するか考える
③ 教科型プロジェクト	教科の応用・発展的な内容	教師	全員同じ	課題解決力/思考力・判断力・表現力等/学びに向かう力、人間性等	教科の文脈で教科の見方・考え方を働かせている
② 教科	教科の基礎・基本	教師	全員同じ	知識及び技能/思考力・判断力・表現力等/学びに向かう	教科に浸る、活動を通して学ぶ
① スキル・リテラシー	漢字/計算/考える技など	教師	全員同じ	知識及び技能	覚える

②研究の経過

時期	取り組み内容	評価のための記録
4 月	研究の方向性を校内研究会で共有	会議記録
5-6 月	カリキュラムに対する子どもの認識の調査 研究授業へ向けて、習得・活用・探究の部会で検討 夏の研究発表会へ向けて各部会で準備	アンケートデータ インタビューデータ 指導案・会議記録・授業記録
7 月	研究授業を実施、全体協議 夏の研究発表会	指導案・授業記録・会議記録 参加者のアンケート
9-10 月	今までの実践研究について学会で発表 研究授業の実施	論文 指導案・授業記録・会議記録
1 月	第3回研究発表会を開催	指導案・授業記録・会議記録 参加者のアンケート
3 月	各部会授業マニュアルの作成	指導案

(2) 2024 年度 2 年次の研究経過

①内容と方法

前年度の実践から子どもは、習得－活用－探究の3つの学びの特徴については概ね捉えているが、つながりまでは十分に認識できていないことがわかり、教師が5つの学習様式の資質・能力のつながりを意識して授業のデザインができていないのではないかという問いが導き出された。そこで、2年次は、5つの学習様式に分かれて部会を設定し、最終的に定義、その学習様式のポイント、事例をまとめて授業ガイドという冊子にまとめることを共通理解し、授業実践に取り組んだ。

実践後、カリキュラムの軸としている個人探究で、子どもはどのような力がついたと認識しているかアンケート調査をするとともに、教師が実践を通してどのような課題を認識したかアンケート調査を実施した。

②研究の経過

時期	取り組み内容	評価のための記録
4 月	校内研究で 2 年次の研究の方針の確認 子どもを対象に探究でどのような力がついたかアンケート調査	会議記録 アンケートデータ
5-6 月	5 つの学習様式の研究授業案の検討及び実施	指導案・授業記録・会議記録
7 月	夏の研究発表会の実施	指導案・授業記録・会議記録
8-9 月	授業ガイドの作成・校正	校正原稿
10-12 月	5 つの学習様式の研究授業の実施及び全体協議	指導案・授業記録・会議記録
1 月	カリキュラムに対する教師のアンケート調査 第 4 回研究発表会の実施 授業ガイドとして「挑戦し続ける学校 SOLAN: 自立・自律した学習者のための教育をつくる」を出版	アンケートデータ 指導案・授業記録・会議記録 冊子
2-3 月	2 年次の実施報告書、研究報告書の作成	報告書データ

4. 代表的な実践

(1) 習得－活用－探究の相互作用についての子どもの認識

カリキュラム評価として、2 年から 5 年の子ども 167 名を対象にアンケート調査を実施した。

アンケートは、習得、活用、探究それぞれについて、「どのような学習だと思っているか」、「学んだことやできるようになったこと」について自由記述で回答を求めた。加えて、それぞれの学習の関連についてつながりが「とてもある」、「少しある」、「あまりない」、「全然ない」の 4 件法で実施し、単一選択法で回答を求めた。理由についても自由記述で回答を求めた。

その後、アンケートの回答をより詳細に聞き取るために、特に探究学習に主体的に取り組んでいると教師が評価した 5 年の子ども 2 名に約 30 分間、半構造化インタビューを実施した。

子どもが 3 つの学びをどのようにとらえ、つながりをどのように認識しているのか、子どもの記述の中で学びの質に関する言葉を抽出し、カテゴリー化し分析をもとに考察を行った結果、以下のことが確認できた。

① 3 つの学びの違いに対する認識

「習得」の学習は、知識の習得を確実にを行うことをねらいとした授業である。子どものアンケート結果から、「勉強や学習」「復習、練習」といった学習のイメージに対する言葉や「漢字・情報」といった学習内容に関する用語が多く確認された。どの学年の子どもも漢字や計算などの学習内容を勉強する時間であり、その時間は集中して取り組み復習・練習が中心で朝の

ウォーミングアップ的なものと捉えていることがわかった。5年生の子どもの中には「45分間はやらなくてもいい授業をモジュールの時間にやる」、「基礎的な能力を身につける」という15分の時間設定の意味も理解していた。ただ、子どもには習得の時間はモジュールの時間という意識であり、45分の教科学習において習得という認識はもてていないことがアンケート結果からわかった。

「活用」の学習は、習得した知識を教科横断的な文脈で活用できることをねらいとした授業である。どの学年も「みんなで協力する」というカテゴリが多く確認された。4・5年生になるとテーマは教師が設定し課題解決に取り組む学習と位置付け、5年生の子どもの中には「みんなで一つの課題について調べて、みんなで世の中の問題を解決する」、「チームワークを身につける学習」等と記述していた。子どもは、単一の教科よりも教科横断型のプロジェクト学習のイメージが強く、社会問題をテーマに探究プロセスに即して調べたり、まとめたり、話し合ったりする協働的な学習と認識していた。ただ、習得した知識・技能を使って課題解決をするという資質・能力の視点での認識はもてていないことがアンケート結果よりわかった。

「探究」の学習は、子ども自身の興味に応じた課題解決を通してこれからの社会に必要な資質・能力を育成することをねらいとした授業である。どの学年の子どもも自分でテーマを設定し、自分で取り組む学習と位置付けており、2年生の子どもは「自分の探究心を育てる学習」、また、3年生の子どもは「テーマの博士となって実験をする」と記述しており、低学年の段階から自分の興味・関心を追究する学びであるという認識であることがアンケート結果よりわかった。

以上のことから、子どもは3つの学びの特徴について概ね理解はできていると考えられる。

② 3つの学びのつながりに対する認識

「3つの授業はつながりがあると思いますか」という問いに対して、「とてもある」、「ある」、「あまりない」、「全然ない」の4件法で回答を求めた結果が図2である。72%の子どもが、「つながりがある」と回答した。その理由についての記述をカテゴリーに分けると「探究とプロジェクトの共通点」、

「情報の活用」、「個別化と協力」、「将来への影響」、「自分の進捗で進める学

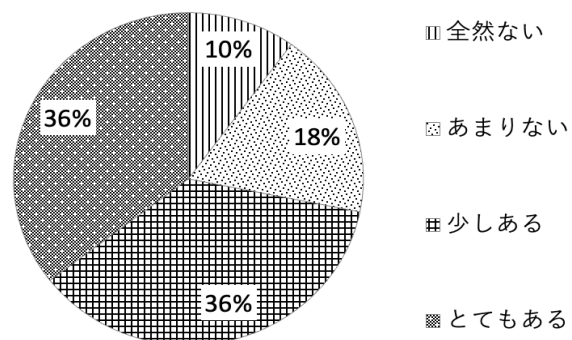


図2 3つの学びに対する子どもの意識

習」、「情報収集と興味の変化」「自己学習」、「タイピング、情報カードや思考ツールを使うことの共通点」、「共通する基礎能力の成長」の9つのカテゴリーが抽出できた（表2）。

一方で、「つながりがあまりない」、「全然ない」と回答した子どもは28%で、その理由の記述をカテゴリーに分けると「授業目的の違い」、「学習内容・活動の差異」、「時間の差異」、「学習集団の差異」、「気づきの差異」、「学習経験の短さ」の6つのカテゴリーが抽出できた。

3つの学びのつながりを認識している子どもとそうでない子どもの理由を比較すると、「つながりがある」という認識をもっている子どもは、学習でどのような活動をどのような方法で、それが自分にどのような意味があるかを認識しており、つながりが見出せない子どもは授業目的や時間などの表面的な違いを捉えて違うと認識していることがわかった。

習得の学習には、考える技の学習があり、思考スキルとそれに対応づけた思考ツールの知識・技能を習得する。それを教科の学習やプロジェクトの学習で使っており、習得した知識・技能が活用や探究の学習の場で役に立った、つまり、ツールを媒介として学びがつながっているという実感を伴った体験がつながりを認識した要因ではないかと考える。

もう一つの要因は「習得」の学習が「探究」で活かされているという実感である。「モジュールの漢字などをきちんとやっていることで、プロジェクトや探究で困らずに活動ができた」というインタビューの発話からもわかるように、探究学習を自分で豊かに展開するためには漢字を覚えるような基礎・基本の学習も重要であると自覚できている。探究学習は自分で学びを創る学習と子どもと共有しており、自力解決は子どもの大きな自信につながる。したがって、漢字を記憶する学習はやらされる活動ではなく、探究で収集した情報を理解するために、やらなければならない重要な学習であるという意味づけができている子どももいると考える。

しかし、3つの学びのつながりがないと認識している子どもは、内容、目的、時間や学習集団など、学びの特徴は理解できているが、どのような活動をどのような方法で、それが自分にどのような意味があるかまでは認識できていないことがわかった。

表2 子どもの3つの学びのつながりに対する認識の分類

つながりがある		つながりがない	
カテゴリー	児童の自由記述例	カテゴリー	児童の自由記述
探究とプロジェクトの共通点	探究やプロジェクトでは要約する力が必要だと思うから。探究とプロジェクトは調べることにつながっている。探究でもプロジェクトでも実験はするものだった。	授業目的の違い	授業には一つ一つ意味がある。それぞれの分類が違うから。全て考え方が違うから。モジュールは先生が事前に授業だし、プロジェクトはみんなで作る授業。探究は自分で作る授業だから。
情報の活用	それwも調べるという関係性があるから。どの時間も情報を集めたりするからつながっている。	学習内容・活動の差異	モジュールは、自分たちでテーマを決めたりするわけではない。
個別化と協力	プロジェクトと探究は関係があるが、モジュールはモジュール単体での学習であり、少しは繋がりと考える。みんなのきずなを深めることが非常に高いから。	時間の差異	プロジェクトは、2時間授業で2こもあるから。15分のモジュールでは探究はやりないから。
将来への影響	全部共通点があって、自分の学力を上げたり自信をつけたり、他にも将来のためにもなるから。いろいろ将来で役立つことが3つには入っているから。	学習集団の差異	プロジェクトはみんなでやる授業だし、モジュールは細かく勉強する時間だし、探究は個人でやる勉強。モジュールはクラスでやって、プロジェクトは学年ごとにやって、探究はみんなでやる時間。
自分の進度で進める学習	授業でやる時と違って、自分のスピードで進むことができる。プロジェクトや探究は自分たちで進めていく授業だから関係がある。	気づきの差異	わからない。思い浮かばない。
情報収集と興味の変化	プロジェクトでワードロスについて調べていて興味をもつて探究のテーマにもするかもしれないから。	学習経験の短さ	まだ、きたばかりなのでわかりません。
自己学習	漢字や計算は、自分たちでテーマを決めたりするわけではないし、協力するところもありないけど、自分たちで進めるのはプロジェクトや探究と同じ。		
タイピング、情報カードや思考ツールを使うことの共通点	どの時間も情報カードを書いたり、情報を集めたりする時があるから。プロジェクトとか、探究とかは、漢字やタイピングが必要だし、プロジェクトも思考ツールとか必要だし、書く力がなくて困るから。		
共通する基礎能力の成長	モジュールは、プロジェクトをやるために基礎的なものを学習していて、プロジェクトは、探究のために考える訓練をやっていると知っているから。		

(2) 子どもの認識の実態から改善した教科型プロジェクトの単元デザイン

子どものアンケートの実態から、5つの学習様式の目的、育成する資質・能力はおさえつつ、個人探究が自分で学びを創る学習になり得るためには、特に活用の学習で何ができるようになり、何をどのように学ぶのかを子ども自らが意識して学ぶことができる単元デザインが重要である。そこで、教科型プロジェクトの方法論を確立しようと考えた。それは教科の枠組みの中で、学習の必然性を生む魅力的なアウトプット課題を設定し、それを通して教科の見方・考え方を働かせることをねらう学習と位置付けた。

子どもに学ぶことの意味を認識してもら
う手立てとして、プロジェクトの1時間目
に、単元を学ぶ意味、目的、身につけたい力に
ついて子どもに「ミッションプラン」(表3)
として説明資料を用意し子どもがこれから学ぶ
ことについて説明する時間を設定した。なぜな
ら、主体的に学ぶための動機づけが、3つの学
びのつながりを意識することにつながると考え
たからである。そのためには、導入でどのよう
に子どもに意識づけるか、教師がどのように探
究課題を提示するかが鍵になる。例えば、6年
生の理科の教科型プロジェクトではお風呂をテ
ーマにした探究活動を通して、日常生活に理科
の見方・考え方を活用する態度を育成する授業
を行なった。pH、硬水と軟水、界面活性剤な
ど、水や水溶液に関する基礎的な知識を実生活
と関連づけながら子どもが自ら探究課題を見出

表3 国語ミッションプラン (一部抜粋)

過程	時間	学習活動	資質・能力	学びの姿・評価材料	教師の手立て
課題 設定	1	・ミッションプラン (課題計画表) をもとに、学習の 意図、目標、内容 などについて理解 する。 ・「鳥獣戯画」に ついて知り、絵巻 から感じたこと、 不思議に思ったこ となどをノートに メモする。	・提示されたミッシ ョンプランをもと に、学習の見通しを もち、意欲的に読 む・書く活動に取り 組もうとする。 (学びに向かう力、 人間性等)	・ミッションプラン を理解し、NHK for School の絵巻を閲 覧したり、インター ネット上で調べたり して鳥獣戯画につい ての基礎的な知識や感 じたことをワークシ ートに意欲的にまと めようとしている。 (学びに向かう力、 人間性等)	・ミッションプラン のプリントを配布し 説明する。 ◆鳥獣戯画 甲巻 「もうすごい国語 文化社編」 NHK for School の絵巻を自由に閲覧 することで、鳥獣戯 画の絵巻を実感さ せる。
情報 収集	2	・「鳥獣戯画」を 読むは論説文で あることをおさ え、仮説がどこに あるか話し合う。	・文章の種類とその 特徴について理解 することができる。 (知識及び技能) ・目的に応じて文章 と図表などを結びつ け、必要な情報を見 つけたり、論の進め 方について考えたり することができる。 (思考力、判断力、 表現力等)	・論説文と説明文と比 較して何が違うかを ワークシートを見て理 解する。 (子どもの様子・発 言) ・仮説がどこにあるか を本文中から探し、 なぜ仮説と言えたり か理由をワークシ ートにまとめている。 (活動の様子)	◆説明文の文章は、大 きく説明文と論説文 に分けられることを 伝え、事例を比較し て違いを明確にす る。 ◆論説文は、社会的 に理解が一致してい ない事例、まだ定説 がない事例に対して 筆者の意見・主張・ 仮説を述べている文 章であることを確認 する。そして、仮説 について説明する。 ◆「『鳥獣戯画』を 読む」の中に筆者の 仮説がどこにあるか グループで話し合う 時間を設定する。
	3 4	文章の構造をまと め、筆者がどのよ うな論の展開の仕 方をしているか話 し合う。	・文の中での語句の 係り方や語順、文と 文との接続の関係、 話や文章の構成や展 開について理解す ることができる。(知 識及び技能) ・目的に応じて文章 と図表などを結びつ け、必要な情報を見 つけたり、論の進め 方について考えたり することができる。 (思考力、判断力、 表現力等)	9つの形式段落の要 点をまとめ、どのよ うな構造になっている のか確認し、筆者 の論の進め方につ いて考えることができ る。(ワークシ ートの記述)	◆文章構造がどのよ うになっているか、 形式段落に分けてか ら「序論―本論―結 論」になっているか どうか確かめる。こ の論説文は、明確に 3つの構造には分け られないことを共有 し、構造化すること の意図について確認 する。

せるように授業を展開した。また、国語では、日本文化を小論文にまとめる単元を構想し、自
分の探究活動を論文にまとめるという活動の前段階として、今まで国語で学んだどの力を使っ
たら良いかを考えざるを得ない状況をデザインすることで、国語の見方・考え方を活用しよう
とする態度を育成できると考えた。

その効果については、さらに実践を重ねる必要があるが、子どもは最終ゴールへ向けて主体的
に課題解決に取り組む姿が多く見られるようになってきた。

(3) 教師のカリキュラムに対する意識

2025年1月に教師に対して実践の難しさを感じている学習様式及びその理由についてアンケ
ート調査を実施した。その結果、困難感が大きかったのは、活用③38.5%、探究⑤30.8%、活用
④23.1%と探究的な学びの授業に対する困難感の割合が全体の約9割を占めていた。その理由か
ら、教科の見方・考え方を働かせた授業展開における「活用③と活用④の違い」や「差別化の
難しさ」が最も多く挙げられている課題の一つであることがわかった。また、習得②で身に付
けた力を活用③で活かす際の困難さや、教科型プロジェクトと教科横断型プロジェクトの違い
を理解し、効果的に授業を計画することに対しても困難感を感じていた。

これらの課題を解決するために、次年度は研修やワークショップを開催し、研修の機会を増
やすとともに、授業研究の場を用意し、学年ごとに先輩教師の成功事例をもとに、具体的な方
法を共有することで、個々の授業力向上を目指していく。

5. 研究の成果

2年間の研究から瀬戸 SOLAN 小学校のカリキュラムについて、子どもの意識を調査し、それをもとにしたプロジェクトデザインについて提案することができた。一方で、まだ教師側の意識調査から、教師はプロジェクトや探究に対する困難感を持っていることが明らかになった。本校のカリキュラムをより質の高いものにしていくために、それぞれの授業デザインについて検討を進める必要があると思われる。

一方で、個人探究を軸にしたカリキュラムにおいて、5つの学習様式があることを全教師が認識し実践研究に取り組み、授業ガイドとして「挑戦し続ける学校 SOLAN 自立・自律した学習者のための教育をつくる」を出版できたことは大きな成果であった。

合わせて、研究発表会を年間2回実施したことは、授業をもとに他校の教師と意見交流することを通して、各自の実践を批判的にみることができ、探究的な学びを生み出す授業デザインについて学び続ける文化作りの一助となった。

6. 今後の課題・展望

2025年に中等部が開校する。9年間の習得－活用－探究のカリキュラムの構築へ向けて実践研究に取り組む。特に、「自分の学びは自分で創る」時間である個人探究が、答えのない問いを自分なりに考え、問い続ける深みのある探究であることを教師や保護者が今一度共通理解し、支援できるように SOLAN の個人探究の理念・方針をまとめるとともに、個人探究で身につけた力を可視化する方法を探っていきたい。

7. おわりに

今、学校現場では探究学習が注目され、各学校で実施されている総合的な学習の時間の単元や教科の学習を見直そうという動きがある。それは、子どもに学びを委ねることで、子どもが主体的に学べるのではないかということである。子ども学習のペースや指導・支援が一人ひとりの学習者のニーズに即している実践を可能にするためには、その基盤となるカリキュラムマネジメントが重要である。教師自身が、自分の受けてきた教育を批判的に見るとともに、これからの社会の変化の中で生きていく子どもの姿を想像し、新たな教育に挑戦していく志を持って実践に取り組みたい。

8. 参考文献

- ・白井俊(2020)OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来.ミネルヴァ書房
- ・山内裕平(2020)学習環境のイノベーション.東京大学出版会